

指導資料

鹿児島県総合教育センター

平成30年4月発行

音楽 第50号

対象
校種

小学校 中学校 義務教育学校
特別支援学校

簡単にできる音階を使った旋律づくりの指導法

歌唱及び器楽分野の指導は自信があるが、音楽づくり分野・創作分野の指導が苦手であるという指導者に対して、簡単に旋律づくりができる指導法を当センターにおける研修での実践を基に紹介する。

1 はじめに

音楽づくり・創作については、歌唱や器楽、鑑賞と比べ、指導者の苦手意識が非常に高い。その理由としては、指導者自身が学生時代に音楽づくり等の経験が少なかったり、指導者になった後にも、研修を受ける機会が少なかったりしたことによるものである。このことは当センターにおける短期研修等の音楽講座から分かった。

指導においては、リズムの反復や変化を使った短いリズムづくりに偏ったり、教科書の事例を基に旋律づくりの指導を行っても、1題材もしくは1単元の中で、全ての児童生徒に完成させられなかったりする傾向が見られる。指導者は旋律づくりになると苦手意識と指導の困難さを感じているようである。

2 旋律づくりのポイントについて

旋律づくりのポイントは、大きく4点ある。1点目は児童生徒が協働した学習を進めるために1グループ二人以上にする。2点目は1単位、又は1題材で完成させるために、つくる旋律の長さは児童生徒一人2小節、最長でも4小節の短い旋律をつくること。3点

目は、音階に含まれる音が少ない日本の音階などを使ってつくること。4点目は、児童生徒の発達の段階によって示すリズムを設定することである。図1は、上記のポイントを基に、中学1年生4人が一人2小節の旋律をつくり、最後につなぎ合わせて1曲に仕上げた例である。どのように指導すれば、このような旋律をつくることができるかを解説する。



図1 ポイントを基に作成した旋律

3 旋律づくりの基本となる音階について

音階は「音の階段」のことで、音が高さの順に並べられている。音階にはいくつかの種類があり、図2の音階はハ長調の音階で、いわゆる西洋の音階と言われる「ドレミファソラシド」の音階である。

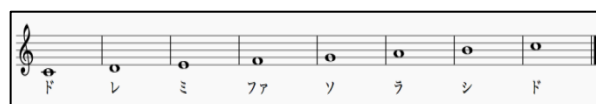


図2 「ハ長調の音階」

図3の音階は「民謡音階」と呼ばれ、日本民謡やわらべ歌に使われている音階である。

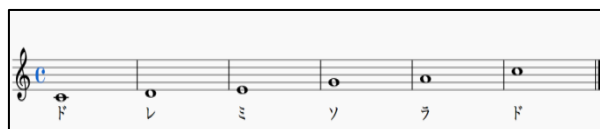


図3 「民謡音階」

図4は「沖縄音階」である。この音階を演奏すると、すぐに沖縄の雰囲気を感じ取ることができる。

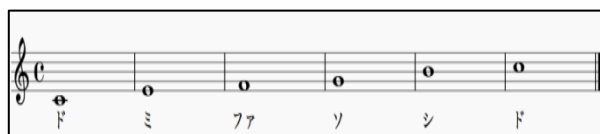


図4 「沖縄音階」

その他の音階として「短調」の音階などもあるが、「民謡音階」や「沖縄音階」などの含まれる音が少ない音階を使った旋律づくりの指導法をここでは取り上げる。その理由については次で述べる。

4 日本の音階について

図3「民謡音階」、図4「沖縄音階」は日本の音階である。図2「ハ長調の音階」(西洋の音階)が7つの音で出来ているのに対し、日本の音階は5つの音で出来ている。そのため「5音音階」と呼ばれている。「ハ長調の音階」と「民謡音階」を比較すると、「民謡音階」は「ハ長調の音階」の四番目と七番目がないことが分かる。このことから「民謡音階」は「ヨナ抜き」音階とも呼ばれている。

この「ヨナ抜き」音階を使った曲は、日本の民謡やわらべ歌だけでなく、現在の音楽にも数多く使われており、児童生徒がよく聴いている歌謡曲などにも使われている。例えば、AKB48の「恋するフォーチュンクッキー」は「ドードレレミソラーラドドラ〜」(ハ長調で記載した場合)と「ファ」と「シ」がない「ヨナ抜き」でできている。私たち日本人は幼い頃からこの5音階の響きに馴染んでおり、今も昔も日本の音階で作られている曲に、親しみを感じるのではないかと考える。

そこで、児童生徒に「日本の音階」を説明する際は、児童生徒の興味・関心のある曲で

「ヨナ抜き」になっている曲などを例示すると、意欲が高まるとともに、5つの音で音楽をつくり出す日本音楽の素晴らしさに気付くことにつながるるとともに、日本の伝統音楽への理解にもつながる。

5 「民謡音階」,「沖縄音階」を使った旋律づくりの実際について

旋律づくりの指導では、以下のような展開が有効である。

- 1 4人1グループを作る。
- 2 どんな曲にしたいかテーマをグループで考える(グループ)。
例:「楽しい昼休み時間の旋律」など
- 3 使う音階を選ぶ(グループ)。
- 4 選んだ音階にある5つの音を使って、2小節の旋律をつくる(個人)。
- 5 指定されたリズムから2小節のリズムを考える(個人)。
※ 4と5は児童生徒の実態に応じ、逆でも可
- 6 各自つくった2小節の旋律をつなげ8小節の旋律にする。
- 7 つくった旋律を演奏しながら、「つながる感じ」や「終わる感じ」(主音)になっているか確認しながら音を修正する。
- 8 完成した旋律を演奏する。

6 「沖縄音階」に含まれる音を使った旋律づくりについて

(1) 拍子は4分4拍子、リズムは4分音符4つでつくる。

(2) 図4「沖縄音階」の「ドミファソシド」の5つの音の中から設定したテーマのイメージに合うように音を並べ、個人で2小節の旋律をつくる(例:図5参照)。

※ 旋律をつくる際は、鍵盤ハーモニカやリコーダーなどを活用し、音を確認しながらつくる。



図5 「沖縄音階」を使った旋律

(3) 各自でつくった旋律を並べて確認する。

図6「4人がつくった旋律」を次の「作成の視点」を基に確認する。

＜作成の視点＞

- 1 沖縄音階の5つ音が入っているか
- 2 4分音符4つのリズムになっているか
- 3 同じ旋律が重なっていないか

＜確認例＞

Aさんの旋律：3つの視点が入っている。

Bさんの旋律：沖縄音階に含まれない「レ」の音がある。

Cさんの旋律：4分音符が8分音符になっている。

Dさんの旋律：2小節目がCさんと同じ。

Aさんの旋律

Bさんの旋律

Cさんの旋律

Dさんの旋律

図6 「4人がつくった旋律」

(4) グループで旋律を確認する。

につなげ、イメージ通りの旋律に完成させる。

各自でつくった2小節の旋律を8小節

以下は検討例である。

ア (3)のAさん、Bさん、Cさん、Dさんがつくった旋律を、グループの中で時計回りに単純に並べてみた。鍵盤ハーモニカで演奏し聴いて見ると、沖縄音階の音を使っているのにも関わらず雰囲気が暗い感じがし、イメージしたものと違うと感じた。

Aさんの旋律

Bさんの旋律

Cさんの旋律

Dさんの旋律

イ 1小節目から2小節目までに、音域の低い音が集まっており暗い感じがする。そこで、最後は盛り上がるような旋律にするためにD A B C順に並び替え、完成とした。

Dさんの旋律

Aさんの旋律

Bさんの旋律

Cさんの旋律

指導に当たっては、児童生徒が主体的に旋律づくりに取り組めるように、それぞれがつ

くったり旋律を並べ替えたり、音を修正したりする時間を十分に取ることが大切である。

7 発展的な旋律づくりの事例について

5音音階（日本の音階）など、含まれる音が少ない音階を用いた旋律づくりに慣れてくると、児童生徒は意欲が高まり、様々な旋律

づくりに挑戦しようとすることから、発達の段階に応じて、拍子やリズム、音階の種類を増やすことが大切である。図7は、4分3拍子で、図8の「アラビアの音階」と図9のリズムを用いて旋律をつくった事例である。

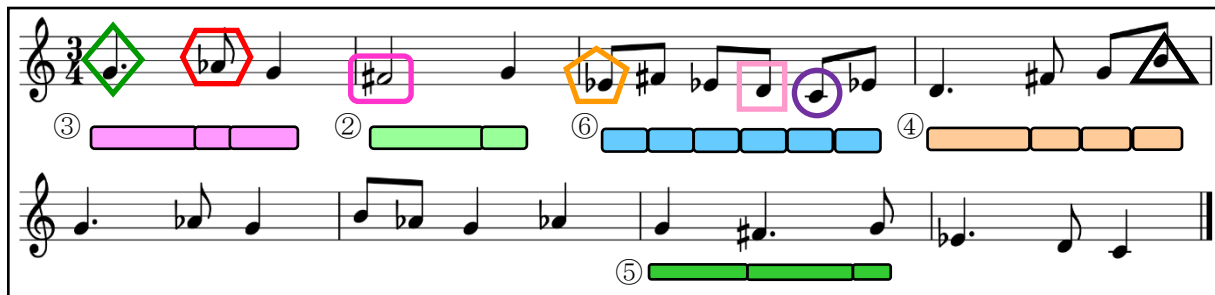


図7 「アラビアの音階」に含まれる音といろいろなリズムを使ってつくった旋律

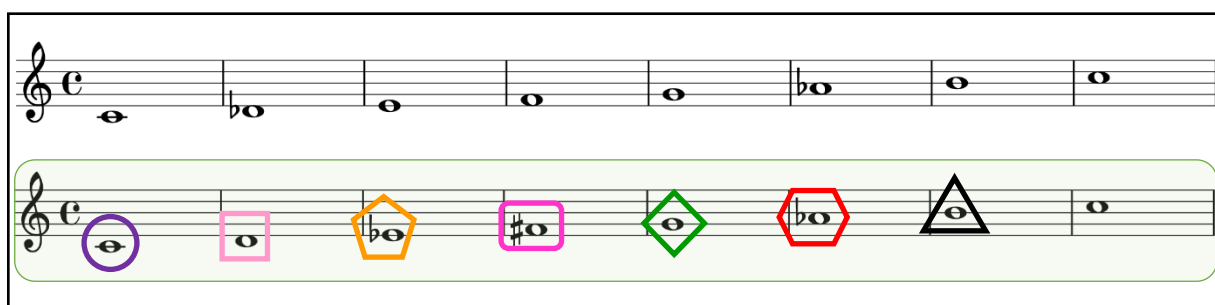


図8 「アラビアの音階」（7音音階）

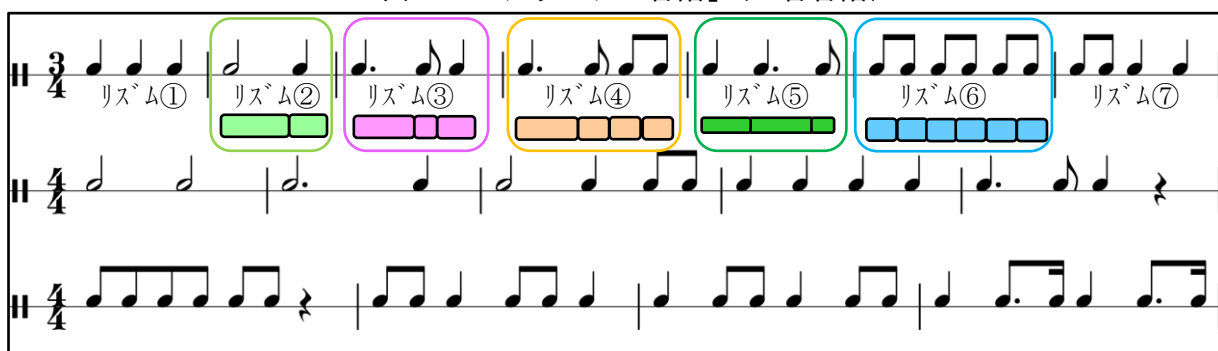


図9 「リズム譜」

8 発表方法について

完成した旋律の発表方法は、つくった2小節の旋律を鍵盤ハーモニカやリコーダーなどで、個人で発表する方法やグループ全員で演奏する方法などがある。個人や全員でうまく演奏できない場合は、代表が演奏する方法なども考えられる。児童生徒の実態に応じて発表方法は指示することが大切である。

9 おわりに

旋律づくりは、音階に含まれている限られ

た音を使うことと、一人がつくる小節数を少なくすることにより、児童生徒が容易に取り組むことができるとともに、旋律を完成させ、発表できる達成感も得られる。これらを基に更なる指導法の工夫に努めていただきたい。

—参考文献—

- 文部科学省『小学校学習指導要領解説音楽編』平成20年，教育芸術社
- 文部科学省『中学校学習指導要領芸術編（音楽）』平成20年，教育芸術社
- 文部科学省『高等学校学習指導要領芸術編（音楽）』平成20年，教育芸術社

（教職研修課 湯之前 学）

